（傾城水滸伝）女水滸伝　十四編ノ壱　笠亭仙果編次　一陽斎豊国画
嘉永四年辛亥春新刻　松寿堂梓

▼：改頁　☆：未翻訳　□未校訂

大箱、呉竹その余の者は園喜代を内裏の女官門田にこしらえて、遙々と善光寺に赴いて加賀之介の家老の娘布多野と云えるを叱りたしなめ、瓔珞、華鬘を拝ませければ驚き尊み且つ恐れ、丹波島へ急ぎ帰りぬ。この隙に各々は所々を拝み巡るに、堂塔の荘厳さは都にもまたあるまじき結構さに、且つ感じ且つ尊み、かばかりの霊場に血をあやさん事は勿体無く罪深けれども悪魔を斬る弥陀の利剣☆もあんなれば、はばかるべき事にもあらじとそれより各々用意を調え、待ち設けたるその所へ加賀之介は百人余りの武士を率いて入り来たれば、呉竹は見やって声を掛け、「内侍の局の御座所、雑人は中門より内へは一人も入るべからず」と制せられて争い難く加賀之介は恐る恐る只一人で堂に上り遙か此方に平伏し、呉竹になじられて遅参の罪を言い訳するを聞きもあえず呉竹は「折りこそ良けれ、計らえ」と右左を見返れば、あっと答えて狩倉、幸目が物陰より躍り出て、これはと驚く加賀之介の細首はっしと討ち落とす。大箱は各々に下知して、控えし家来の武士を斬り散らせば、彼の者どもは上を下へと慌て惑って、争う者は更に無し。たまたまに手向かいする者は門外に隠れ居し竹世、岩飛葉に斬り伏せられ、この由聞き付け遅ればせに、駆け付けし者どもは琴樋と下貝に支えられて悶着くしつつ、誰も命が惜しければ大方は降参し、最早敵たう者も無ければ、大箱と呉竹は瓔珞、華鬘、その余の仏具を園喜代らによく守らせ、丹波島を指して行くに、城中にも早火を放ち、桜戸は黒姫らと妙達と衣手を過ちあらせず助け出し、塗り込め土蔵に蓄えた金銀米銭こと如く、奪い取って帰り来たり。

大箱らと一つになって戸隠山へひとまず帰り、ゆるやかに仕度を調え、衣手は云うも更なり黒姫、女鬼、今板額らも皆大箱に従って賤の砦へ急ぎけり。凱陣の由聞こえければ小蝶は遠く出迎えて、四人の者に対面して三世姫に目見えさせ、大箱らの手柄を誉め、門田の局へ▼瓔珞、華鬘、その余の品々を残らず返して友達を救いたりし喜びを述べ、その由告げて黄金千両贈りけるを門田は否むに由無く受け収め、ひたすらに三世姫を世にいだし彼女らの本意を達せさせんと何くれと語らいて、賤の砦を発ちいでつつ善光寺へ赴いて、御宝首尾良く奉納あり。

これより都へ帰られての物語りはここには記さず後々に詳しくすべし。

〇さてもその後、江鎮泊には事無く数多の日を経しが、例の朱西が山へ来たり。この頃この国の三上山に三人の女の山立ち（山賊）が砦を築いて下を従え、行き来を悩まし民家に押し入り、あまつさえ賤の砦を討ち潰して味方に付けんと罵る由を告げ来たり。その第一は山分衣埴摺とて、邪術を使い、雨を呼び、風を使えり。次は八丁鐘小充とて、元はうがし☆の娘の由、その次は飛狐お紺とて、伏見の里の稲荷の禰宜（神職）の娘にて、いずれも不敵の女と聞けり。

捨て置きたまえば面倒ならんと云うに呉竹は笑いつつ、
「また三人の味方を得たり。志だに素直ならば説き伏せて、我が手に付けん。討っ手には誰をがな」と云うを聞くより衣手は
「我ら今参りの手柄初めに許させたまえ」と所望して、戸隠の三人と一つに彼処へ赴きけり。この

山はその昔、田原藤太秀郷（藤原秀郷）※が退治せし百足の住みし山なりと云い伝う。既に合戦に及びしが、衣手らは元よりも案内知らざる所なれば、小充、お紺に斬りまくられて一戦にて敗北し、武佐の宿に退いて評議まちまちなる所へ、多くの士卒を従えて花的、除夜が加勢に来たるに、なお心許無しとて、大箱自ら、▼呉竹、著、節柴、朱良井、芍薬、末広、早蕨、黄葉、筒鳥、薄衣、これらと共に馳せ来たり。

敗北の由を聞き、呉竹の止めるを聞かずに大箱は駒を休めず、三上山の麓の里へ馬を乗り付け、山陣の有様を見てあれば、日も早暮れて暗かるべきに青文字にて張りたる灯籠が幾らとも無く灯し連ね、その光は昼の如し。

著はこれをつくづく見て、

「青色の火を用いるは妖術を行う者が陣中に在りと覚ゆ。私も一術行わん。明ければ一つの陣を敷き、彼の輩を生け捕らん」と云うに大箱は勇みをなし、武佐の厩に引き退き、次の日の朝未だきより、またも麓へ押し寄せて、孔明が鍛錬せし八陣を敷き連ね、なおしかじかと各々に謀り事を示し与え、手配り早く調いけり。

※田原藤太秀郷（たはらとうたひでさと）：藤原秀郷は平安時代中期の貴族・武将。近江三上山の百足退治の伝説で有名。

〇山分衣埴摺は黒き馬にうち乗って、小充、お紺を左右に従え、左手（弓手）に真金の鎚を持ち、右手（馬手）に魔法の剣を引っ提げ、まっ先に進みいで、口に呪文を唱えれば怪しき風がたちまち起こり、砂子（砂と小石）※を飛ばし空を曇らせ、日の光は更に見えず、これを合図に小充、お紺は士卒を従え、大箱の陣中へ早着き行ったり。大箱は思うままに深入りさせて引き包めば、黒姫、女鬼は合図の旗を彼方此方へ振り動かし、著は例の剣を抜き持ち、呪文を唱えれば彼方より起こりし風も雲も消え、小充、お紺の足元より新たに黒雲吹き湧いて、更に隘路（狭い道）※も見え分かず、慌てふためき駆け巡れども、更にいづべき方も無くて途方に暮れて立ったる所にたちまち「がば」と土裂けて、小充もお紺も馬諸共に落とし穴へぞ落ち入りける。

埴摺は初めより後に控えて居たりしが、二人を救う事はあたわず、大箱の手の者に追い崩されて方々に我が住む山へ逃げ駆けりぬ。

※砂子（いさご）：すな。細かい石。まさご。　※隘路（あいろ）：①狭い道。②難関。ネック。

大箱は小充とお紺を縛めさせて引き出して、例の如く縄解き捨てて忠義を諭しいたわるに、二人はたちまち心服し、ひとまず山へ立ち帰り、大箱らの忠信仁愛、三世姫の御為を思うの他は只無き由を埴摺に語り聞かせて降参を勧めれば、埴摺も大きに喜び、

「私の父は秩父の次郎重忠の家来にて半沢六郎の末の子、北条に恨み深し。小蝶、大箱に従って、主人の恨みを晴らすべし」と、やがて心を一決して降参の旗を立て、大箱の陣所に到れば大箱は出迎えて、各々に引き合わせ、著はことさら埴摺に五大天神☆の正法を伝え、それより三軍列を調え賤の砦へ帰りけるに、飯浦の辺りにて葦の茂みをかき分けて、たくましげなる旅の女がつかつかといで来たり。

大箱の前に跪き、「しばらくお馬を留めたまえ」と慇懃に一礼すれば、大箱は馬より降りて我が名を名乗り、その名を問い、その由をいかにと問うに彼の女が云いけるは

「私は信濃の望月に野飼いの駒（馬）を多く持ちたる竹六と申す者の娘で名をすみと申しはべり。

彼処にすみと呼ぶ女は三人まで候ゆえ、私には父の名をおばせて竹澄と呼ばれたり。さてもい一昨年の秋の末に竹六は鎌倉へ召されし馬を引き行って、北条家にありつるが、政村殿が乗られしに馬の心を知られざりけん、落ちて▼したたか怪我せられぬ。その腹立ちに義時殿は悪馬をば参らせたりとて父をひどく責め、鞭打ち牢屋に繋ぎ置かれしが、一夜にして息絶えたり。国にあってその由を聞くに悔しく口惜しく、私が顔を知る者無ければ、北条家に奉公成して、油断を見澄まし近づいて、親の仇の義時殿を一太刀なりとも斬り付けんと思えど頼る縁も無く、山家育ちで行儀も知らず。無念の月日を送る程、聞き伝えたる賤の砦の大箱様の忠信仁義。ことさらこの度、丹波島の加賀之介を滅ぼされし智謀勇猛は噂も高く上野、信濃に隠れ無し、皆これ三世の姫君へお尽くしなされる忠義の業と密かに知って親わしく、一人で危うき業をせんより立ち寄らば大木の陰、いかなる卑しき業をしても姫上様へご奉公、各々様の仲間に入り、行く行くは北条の家を滅ぼし、父の仇を報いんものをと初めての見参のお土産に年月父が飼いなして秘蔵なしたる白馬一匹、玉獅子と名付けたる名馬を引いて遙々とこの近江路へ急ぎの道中に関ヶ原にて思いも寄らず数多の女の兵に捕り込められて、彼の玉獅子を奪い捕られて、心のみやたけ☆に逸れども多勢に無勢で命を拾い逃げたるが、まだしもの仕合わせにて、おめおめここまで忍び参って恥を捨てての今日のお目見え。その女の武者どもは伊吹山の麓の里に衣通村と云うあって、そこに衣通長者とて家も富み、武威もあるかう侍が五人の女の子を持ちたるが、皆優れたる手利きにて大胆不敵の者の由。賊が岳の砦をたいらげ都に上り、女武者の頭にならんと、この程はしきりに戦を調練し、武具を調え刃を鍛え、良き馬なんども集める由。私が引きたる玉獅子を早くも見付けて奪いしならんとその辺りの人の評判、ご油断ばし候うな。かくて私は力も無く武芸も知らねど願わくば、御砦にお差し置き、例えばお召しの洗いすすぎ、お庭まわりの掃き掃除、いかなる業も厭うまじ。お使いなされて▼くださりませ」と額を土に擦り着けて、よき無き体に大箱は哀れみの心を起こし、竹澄の姿を見るに力も強げに骨組み堅くまた顔形も卑しからねば、また良き味方を得たりと喜び、呉竹、蕃にかくと告げて打ち連れ砦へ立ち帰りぬ。

小蝶は例の出迎え、勝ち戦を喜びねぎらい大座敷にて酒宴を設け、竹澄の身の上話、また彼の馬が世の中に二つとも無き名物の由を聞くに付けても衣通に奪われしを深く惜しみ、かつ我が砦を攻めんと云うその用意が何程の事ならんと易からず思えば、次の日夏女をして彼処へやって有様を密かにうかがい聞かしめるに、半日ばかりで帰り来て小蝶らに向かって云う様、

「衣通の里と云うは実に伊吹の山近し、元は野原にて人家無し。百年ばかりその昔にこの辺りの人の娘の笹蟹と云う女は顔麗しく照り輝き、肌への艶は薄衣を透き通る如くなり。允恭天皇の御后の衣通姫※と申すは御身の光が着物を通し、同じ坂田の郡の生まれで方々縁ある美人とて今衣通とあだ名せしが、遂には時の帝へ召されて御寵愛上も無く、物数多たまわって、親兄弟も自ずから勢い強く類広がり、後には名字も衣通と名乗ってこの地に屋敷を構え、今に至って五代相続。村の名をさえ我が名字付けたる程に威勢強く、主人の名は弄太夫、男子は無くて娘五人、血筋を引いてか器量良く、その上、武芸も並々ならず、姉を温手、次を寒川、その次を縄則、その次を魁、あと娘を豊栄と呼べり。また武芸の師が二人あり。ことに優れしは渋木女、いま一人は糠江。共に弄太夫の家にあって、二三千の人馬を集めて四五十挺の牢輿をこしらえ、賤の砦を攻め落とし、小蝶、大箱を始めとしてこの牢輿に押し入れて、都へ送り恩賞に預からんと勇みに勇み、実に玉獅子と云う

馬ならんを渋木女に乗らしめて、戦の駆け引きの調練最中。由々しき▼大事に候わん」と云うを小蝶は聞きながら、怒りに迫って立ち上がり、
「此度は自ら馬を出し、衣通の五人娘を押し並べて首にせずば再び砦へ帰るまじ。私と共に行かんと思わん方々はさぁ用意あれ」と急き立つを大箱は
「あな、はしたなや、小蝶の刀自。御身は砦の総大将。自ら出馬は軽々し、なお我々が」と止めれど聞かず、
「御身達は数度の戦に疲れもさこそと推し量られる。今度はまげて私に任せ、休息あれ」と止めても聞かず、遂に次の日の暁より、三千余騎の人馬を発し、江鎮泊を発ち出けり。

※衣通姫（そとおしひめ）：記紀（古事記と日本書紀）に絶世の美女と伝承される人物。

つき従う大将は桜戸、芍薬、除夜、末広、味鴨、下貝、二網姉妹、夏楊、岩飛葉、早蕨、黄葉、真弓、杣木、燕、飛子、大鳥、山桃、竹澄、これかれ合わせて二十人が前後を囲んで打ち発ったり。
大箱、呉竹、薯らは尾車坂まで見送るに、別れの盃を巡らす程、ざっと吹き来る山おろしに新たにこしらえ立てたる大旗竿は半ばより吹き折れたり。「あら忌み忌みし」と顔を見合わせ、各々色を失う中にも呉竹は眉に皺、
「出陣に旗が折れしははなはだ不吉の印なり。今日は留まりたまうべし」と諫めれども小蝶は聞かず、
「風無くて折れもせばこそ、あやしとて忌みもせめ、風強くて物を破るは世の常の事なり」とて、大箱共に諫めても意見も聞かず、思い立つ日を吉日と勇みに勇み、遂に敵地へ赴きけり。大箱は大になげき、夏女を後より遣わして戦の様子を見せしめけり。

小蝶は既に衣通の里近くに陣を取りって所の様を見巡らすに、藤川の枝川は三方に流れ、伊吹の山を鬼門（北東）に控え、世の常ならぬ要害なり。この時早くも衣通の四女魁は物の具して、柳の茂れる林より数多の兵のりしろにひきで☆、まっしぐらに駆け出て、散々に罵れば、「物云わすな」と小蝶かけぢに☆先に進みし桜戸はうぬ一打ちと立ち向かい、槍を合わせて戦いしが敵し難くや魁は柳林へ逃げ入りつ、伏せ勢もやあらずらんと桜戸も馬を返しぬ。
かくて次の日、衣通の村の口まで押し寄せれば、待ち設けたる▼五人の姉妹、渋木女、糠江と諸共に駒を並べて出迎えて、こしらえ置きし彼の牢輿を目先へかき出し寄せ手に示し、姉の温手を指さししつつ、
「京鎌倉に弓を引き、民を掠める女盗賊。今日しもここへ来たりしは飛んで火にいる夏の虫。こと如く生け捕って、この牢輿にかき乗せて都へ送る。覚悟せよ」と罵られて、多力の小蝶は怒りに耐えず駆け出たり。かくて両軍入り乱れ、半時余り戦いしが未だ勝負を定めるに及ばず、相引きに引きたりけるが、次の日よりは衣通の陣中には人も見えず、小蝶らは怪しみつつ思わず三日を経たりしが、痩せ枯れたる法師が二人、小蝶の陣に入り来たり。
「我々は伊吹の麓、太平寺の末寺法華寺と申すに住めり。衣通の親子の者は一人として慈悲心無く、軍用金の用意とて寺の物を押し奪い、乱暴狼藉、古の提婆達多※に勝れし仏敵、今しゅうぐん☆の寄せたまうに叶い難きを知るにより、麓の谷の別荘に引き退いて不意を討つ計略の真っ最中。

寺は辺りに近き故に道の案内も良く知ったり。賤の砦の方々は慈悲者ばかりと予て聞きけり。我々導き致すべし。▼寺のため我らのためにさぁ押し寄せて討ち滅ぼしたまえば、いかに嬉しからんとわざわざこれまで参りし」と語るを聞いて小蝶は喜び、二人の法師をもてなして、なおその事を詳しく問うを桜戸は怪しんで仇の謀り事ならんと心を作れど小蝶は聞かずに遂にこの二人の僧に案内をせさせて軍勢引き連れ、まず法華寺へ赴いて、それより法師を先に立て、その夜の子の刻にうちいでて山の細道踏み分け行くに、ようやく一里もたどらぬ程に二人の僧は隠れて見えず。この時、石火矢、鬨の声、天に響き地を動かし、松明の光は昼を欺き、幾千万とも知られぬ軍勢が山中に満ち満ちて、或るいは石弓を弾き、弓に射すくめられて進み得ず、また退かん道もさえられ、ああいかにせん。その時小蝶は流れ矢に乳の上はっしと射られて馬より下にぞ落ちにける。芍薬、燕は近づく敵を斬り払って味鴨と竹澄と小蝶をようよう助け出し、桜戸は手痛く戦いて、命を捨て囲みを切り抜け、夜明けの頃に本陣まで敗軍集めて帰りしが、大将分にも手を負う者がこれかれあって、軍兵は討ち死にせし者多かりけり。

※提婆達多（だいばだった）:釈迦仏の弟子であったが、後に違背したとされる。

（傾城水滸伝）女水滸伝　十四編ノ二　笠亭仙果編次　一陽斎豊国画

さても小蝶は痛手ながらも矢を抜き取って見てみれば、衣通の軍師渋木女と漆もて印したれば、小蝶は怒りの歯噛みをなし、やがて悶絶したりしを桜戸は金瘡※の薬を与え介抱するに、程無く息を吹き返し、心は確かになりぬれど、矢尻に毒を塗りしかば、さばかりの傷にはあらねども、身ぶくはおぼつか無し。輿に乗せて、二網姉妹、真弓、杣木に守らせて、賊が砦へ送り遣わし、桜戸と芍薬は陣を守って戦わず、その夜又、敵にかけられ、再び士卒を数多討たれ、大箱よりの指図をも待ちえずに帰陣する所へ、夏女は早くこの由を大箱に告げしかば再び此方へ迎えに来たり。

※金瘡（きんそう）: 刃物による切り傷。刀傷。切り傷の治療法。

すなわち共に立ち帰るに、小蝶は医療に手を尽くせども更にその印無く、既に息も絶えんとせしが更に心を励まして、三世姫にもお暇申して諸大将を方辺に招き、
「諫めを聞かず不覚を取りし、我が誤りをひたすら悔やみ、この上は時を計って衣通一家を微塵と成し、渋木女を殺す者をもって総大将の位に備えて共に忠義を励みてたべ。さて今日までは口より外へ出すは女々しく思われて、各々たちにも告げざりしが、私に一人の妹あり。七ツの歳に拐わかされて、その後今まで行方を聞かず、ひとはというて器量も優れ、女子ながらも力が強く、人に勝って賢き生まれ、今年は二十四にやならん。遊女、舞子に売られしか、力があるので思わぬ災い引き出して非命にしせしか、まめでいるのか知る様も無し。もしこの辺りへ来る事が▼ありもやせんと心には折々恋しく思いしが、遂に再び巡り会わず、儚くなるも本意なげなれど、そはともかくも姫上の世にいでたまうも見届けず、皆のお方に別れる悲しさ、推量あれ」と云う声も、ようよう細って弱り果て、その日の夕暮れ息絶えけり。

三世姫の御嘆きは更なり、各々も声をあげて泣く中にも大箱は涙も出ず、目をくらまして気を取り失い、更に物の用に立たず、呉竹、著は諌め励まし、「遺言はさる事なれども、一日も総大将なくては萬に不便なり。事の変も計られず」と争って受け引かぬ大箱を呉竹は三世姫にしかじかと宣えと教え参らせ、まずともかくも仮初めに総大将になるべしと姫君に云わせければ、大箱も否むに由無く第一の位に座し、それより諸将の位を正し、門関出口出口の固め、その役々をおごそかに置いてければ、砦の要害、昔に勝って堅固になりぬ。

これより先、小蝶の棺は後ろの山の良き地に葬り、仏事作善（善根）※は上も無く、追善供養も日々怠らず、折しも筑紫の太宰府の安楽寺に久しく住みし大円和尚と云う法師が都へ上りしそのついでに、竹生島長命寺、この辺りを遊覧せんと朱西の店に休らいければ、予て大箱は云い付けて、貴き法師が来たらん時は山へ誘い来たれ。となれば朱西は小蝶の為に回向を頼むその由を懇ろに告げ、船に乗せ賤の砦へ誘いければ、大箱、呉竹は大きに喜び、やがて清けき座敷へ招じ、なお故由を詳しく語るに、大円は異議無く受け引いて七日の法会を修行あり。

その後に大箱は大円に山水の景色を見せんと見晴らし良き所へ連れて行き、様々にもてなし、小蝶の刀自が身まかって、山陣真に心細し。彼の刀自に代わる程なる忠を兼ねて忠義の心深き人が世に無き事かとうち嘆くを大円聞いて、

「問わず語りに似たれども、云わねば心の済まぬ一條、今日は詳しく語るべし。太宰府の町に探題の用きく彼処にては二とは下がらぬ大金持ちにて、昔より許しを受けて、二腰帯名字も付けて名乗る家柄、唐物を広く商い、芦城呂太夫とか云う者の後家に▼一人の女丈夫あり。博多の町で十七八まで、遊女の務めをしたりしが、力は男の十人力、剣術、柔に自然と達して心も剛に肝太く、しかも顔色いと麗し、義にすすみ、強きを挫きいささかも曲がりし行いする人あれば、その身に関わらぬ事をも腹立ち怒り、女らしき所無ければ奴三笠とあだ名して、主人もすこぶる手に余して心のままに務めさせしが、呂太夫は本妻に別れて一人寝寂しき折から三笠に馴染んで、その気性が世の常ならぬを返って愛し、身をあがないて後妻とせしが、一歳も経ざる間に呂太夫は病死なし、その後三笠は後家（新夫）をたて、歳はまだ二十四五才と若けれど、行い正しく家のうちどをよく収め、探題への仕送り、また商いの掛け引きも夫に劣らず賢く扱い、その上その力量、早技は人敬わぬ者も無し。

初め博多に在りし時、そこの土蔵の主と云う蟒蛇とも云うべき大蛇悪者好きの客に望まれ追い出して手取りになし、恐れる顔色更に無し。昔、雄略天皇が小子部栖軽と云う勇者に三室の神奈備の神体を捕らえさせたまいしにも劣らずとて、今栖軽とあだ名を付け、名も玉桐と改めけるが、昔のままに今栖軽の玉桐と今にても続けて呼ぶ人多し。天満宮を常に信じ、しばしば宮居へ参詣して、宮僧（神社の僧）※も折々対面せり。ある時その婦人が云いしは「私は元津の国の東成の郡の村長なにがしの娘にて、七つの年にかどわかされ、今こそは人並なれど一度は畜生に▼余り変わらぬ浮き務め、浅ましとも浅ましけれど、なお浅ましきは私の姉の小蝶と云えるも女にあらず、力も手並みも世の稀もの、義心を磨くが身の仇にて、山立ち（山賊）となり、近江の国の賤が砦の大将とあふがれる由をほのかに聞きたり。世の正無さを憎むことは道理なれども、朝廷へ弓を引いては謀反人、遂には刃の錆となり果てたまわんこそ愛おしけれ。御意見申し上げたいにも道も遠し身もままならず、もしも都へ上りたまえば世捨て人は咎めもせじ、賤の砦をお訪ねあって、妹はかくて筑紫に在り、こうこう思うとの一言を姉の小蝶に伝えてたべ」と云われし事を今も忘れず、湖水見がてら近くへ

来たり。
　朱西殿の物語りで初めて聞きし姉御の最後、その亡き後を弔うも浅からぬ縁なれど、同じくは一二月も早くばよしや志違える姉と妹なりとも、小蝶殿も我が言伝を憎しとは思われまじ」と、残り惜しけに物語れば、大箱らは小蝶の遺言に一つ一つよく合えば、遺恨やるかた無かりけり。
　大箱は玉桐がうまれだちの親わしく三世姫の御事をも大円に詳しく明かし云うにもして、玉桐を我が山陣へ迎えんと思えども遥か遠くに住んで何不足無く世を渡り、我らの心の底は知らずに山賊とのみ思いとり、人の様にも思わぬ様を大円になお詳しく聞いて、「容易くは我が群れに入ることあらじ」とうち嘆くを呉竹はうち笑みつつ、
「私の拙き計略にて遠からずいらに☆加えん。必ず憂いたまうな」と事もなげに云いければ、小蝶の刀自の妹の玉桐をこの山陣の大将と為せば、さぞかし亡き霊も嬉しからんと大箱は口に云わねど心は急がれ、呉竹を催促してその計略を行わしめつつ、また大円は数多の▼布施物を受け納めて砦を発ち出て北国の方へ赴きけり。

※作善（さぜん）：堂塔・仏像の建立、写経・追善供養などの善根を行うこと。

※宮僧（くそう）：社僧（しゃそう）。神仏混淆の結果、神社に所属して仏事を修した僧。

［これよりここの絵解き］されば筑紫太宰府の芦城の後家玉桐は卯月（四月）の初め、いつもより早く暑さがもよおして、合わせ五月蠅き立て膝にいなじむ蠅は珍しく眠気さしたる物見の窓、往来俄かに騒ぎたち、童の声かしましきに何事なるかとさし覗けば、人柄良き女の占いが共に連れたる大童子に預察禍福※の四文字を印せる小幟を押し立てさせて、自ら著の袋を携え、
「津の国の浪速の事も問えや人身の善し悪しを我諭してん。我が占形を問わんとならば、銀一両を与うべし。指すところ真の如し」と声高く呼び張れば、彼の童子は弁慶がまだ鬼若と云いけん時の心地せられて、恐げなる顔にてむむとうち笑みつつ、物云いたげに頭を振り手を動かすは唖なるべし。

※禍福（かふく）：災いと幸せ。不幸と幸福。

その様の可笑しさに笑えば睨んで追わんとするを面白がって、騒ぐなりけり。見料の高きにそへ、その人物が只者ならねばさして問うべき事は無けれど試みばやと呼び入れて、まずその住所と名を問えば、
「私は浪速の亀占とて、やがて津の国の彼処に住めり。天満神へ参詣の折から路用の乏しきを補わんとて、この地にて今日一日は業を売れども、信無き人にはいかでか示さん。御身は何をか問いたまう」と言葉涼しく云いければ、玉桐は亀占がちか勝りせし、ようぎ☆の物言い凡ならぬに信を起こし、
「私は先年▼夫に離れ、今一人身にて暮らせども、憂いも無ければ災いが来たらん程の罪も作らず。されども天に時ならぬ雨風起これば、人の身に不意の災い無きにもあらじ。当家を占いたまえ」とて年の数、生まれ月など詳しく語れば亀占は著（筮竹）を数え卦を立てて、世に驚いた顔色にて、
「あら笑止や。御身には百日の内を出ず、険難（苦難）※の災いあり」と云えば玉桐は気色を変え、
「それは容易き事にあらず。死するも天命。さりながら、もしその災いは逃れるようもあるべくや」と問いければ亀占は再び著を数え、

「もしこの国より寅の方（北東）の二百里の外に赴きたまえば、厄難決して身に及ばじ。されどなお少しばかり驚く事はあるべきか。それはた良きに転ずべければ、憂いたまうに及ぶべからず。世に呪いと云う事あり。生物知り（知ったかぶり）※は疑えども、信じる者には印しあり。御門い出あらん時に口の内にてこの歌を三度唱えさせたまえとて、「立ちいでは待つ人もあらじ、きたなけき里は再び反みもせで」、忘れぬ様にこの壁の白きこそ幸いなれ。書き付けたまえ」と教えれば、玉桐は何の心も付かずに云うがままに書き記せば、亀占はよく見終わり、銀子一両を袂に納めて薄物の被布ひる返し、可笑しき童を引き従えて何処ともなく立ち去りけり。

〇玉桐はこの事が心に掛かり、継子の買次郎、重手代の利己蔵などを呼び集め、
「占い者の事を告げ、年毎に鎌倉へ唐物の商いに人を下すが例なるに、今年早く難逃れがてらに我が自らいで立つべし。利己蔵は大儀ながらも代物を改めて荷を造り、馬に付けて宰領して供をせよ」と俄かに旅の用意をなす。この玉桐の気に入りの腰元に波鼓音鳥とて、二十に足らずいと美しき娘あり。これも彼の博多の町に幼き時より舞子をして、舞い歌い、琴、三味線、ことに鼓をよく打って、萬の芸能つたなからず、国々の言葉の訛りもよく覚えて弁舌すぐれ、また生まれえて揚弓（小弓）を良く引きしより押し広め、後には真の弓をもよく引き、玉桐の相手となり剣術をも大方覚え、世に珍しき女なり。志さえまめやかに、しおらしき▼生まれなれば、玉桐は深く愛し、夫に乞うて身をあがない、我が傍らにて召使い、桜、紅葉の華やかなる着物を着せて派手に作って、今も舞子の如くに装わせて常に共に足りければ、此の度も必ず連れ行くべきに、生憎脚気の病に悩み、とみに怠るべくもあらねば、力無くも利己蔵のみ共に連れて、下男二人には服、調度を担がせ、東の旅にぞうち発ちける。

〇寅の方へと云いしかば、船を難波の浦に付け、それより都をうち過ぎて近江路より越後の方へと志すにも、姉の小蝶が賤の砦に住めりと思えば訪ねたくは思えども、彼の一群れは公に弓を引く烏滸の者、仁心（なさけ心）※ありと人は云えども、畢竟（結局）※は天下の罪人、姉たりとも面を合わせて親しまんは身の汚れ、名の恥なりと思いながら、なお懐しくて賊が岳の麓に到り、ここ彼処を見巡らす程に合図と見えて、口笛の音につれて、向かいなる林の内より数多の軍兵が鐘、太鼓を打ち鳴らし、「玉桐やらぬ」ときって出る。

あっと驚く此方より、鉄砲の音が多いに響き、また一群れの軍勢現れ、躍り出たる旋風力寿は高く声を上げ、
「今栖軽の刀自、亀占の供をしたりし大童子は我なりしを知りたまわぬか。その時は仕損じをすまじき為に物云わず、四文銭を口に含み、こらえて唖の真似せしが、今日ははらぎり☆物申さん。かく申すは力寿とて大箱殿の大の気に入り、ここまで御身を迎えに出たり。呉竹殿の計略にて、ここまで欺き寄せたるも御身を砦へ迎え入れたさ。各々が待つこといと久し、さぁさぁ山へ御座すべし」と呼び張れば玉桐は
「謀反巧みの大箱らが私に何の用あらん。会いたくば、ここまで来たれ。首にしてつかわさん」と早腰刀を抜き出して斬ってかかれば、「心得たり」と力寿は例の二振りの斧でこれを受け止めて、二打ち三打ち戦いしが叶い難くや逃げ出すを逃さじものと玉桐は追い行く向かいへ妙達尼は、「芦城

の後室よくこそおいで。さぁ山陣へお越しあれ」と向かえば玉桐はいよいよ怒り、無二無三に討ってかかれど妙達は更に戦わず、林の内へ逃げ入れば、また立ち代わって、女行者竹世も同じく真似事ばかり、刃を交えて駆けり行く。次にいづるは味鴨、末広、上不見鷲の岩居と三人等しくかかるを物ともせずに玉桐は秘術を尽くす程に、山の上にて引き鐘を鳴らすに三人は敵を捨て、一目散に駆け行くを玉桐いらって追い行く程に思わず高き山へ登りぬ。麓に笑う声すれば、あらいぶかしと見下ろすに利己蔵始め下男を皆縛めて宝の荷物を▼車に積み、大勢の雑兵らはこれを守り、下の道をぞ行き過ぎる。玉桐怒って山を下り、車間近く追い行く所へ朱良井、稲妻が立ち出て、様々に諭せども耳にも掛けず斬りまくる。折しも彼方の山の上に白旗をなびかして大箱、呉竹、薯の三人が兵数多従えて、

「玉桐主、心を鎮め、私共の云う事をよく聞きたまえ」となだめる中にも呉竹は微笑んで、

「御身をここへ導き出して、三世姫へ御味方させたさ余って、遙々と筑紫へ渡り、亀占と名乗って御身を欺きしはこの呉竹にて候なり。欺かれしを怒りたまわで、まげて砦に留まりたまえ」と云えども玉桐はじゆうをはり☆、いよいよ怒って荒れ回る、後ろにひょうと飛び来る征矢は玉桐の笄を中より発止と射砕きたり。此は花的の仕業なり。玉桐これには肝を冷やして逃げ出せば、桜戸、秦名、芍薬、除夜が軍兵従え四方より取り巻くに、玉桐も戦い疲れ、ようよう辛くも一筋の道切り開いて逃げ延びけるに、日も夕暮れて道暗く飢え疲れて歩まれず、と角して余呉の海の海端へいでたりけり。

この時渚を漕ぎ出る網船あって、女の船長は玉桐をうち見やり、

「不知案内の旅人か。江鎮泊のここは麓、うかうかここらに居たまえば、物も命も盗られたまわん。さぁ人里へ出たまえ。されど陸路は道くどし、船にてやれば近くて早し。二メの銭をたまわれば、夜網を休んで川波村へお渡し申さん。乗りたまわずや」と云うに玉桐大きに喜び、二メはおろか十メも銭はいとわず、さぁさぁと早その船に飛び乗れば、船長は櫓を押しつつ、半道ばかり漕ぎ行くに、葦の茂みを漕ぎ分けて、一人の女が棹差しつつ、ひなびたる声を上げ、「桐の付いたる玉さえあれば、黄金白銀こちゃいらぬ」と歌う彼方にまた一艘、▼これも同じく女の曲者、「いつか近江と待つ甲斐あって、心筑紫の人がくる」、又も一艘漕ぎ出て、同じ姿の尼を止め、「例え後には待つ人あろと、君を里へ返すまい」と歌い連れつつ玉桐の船を中にぞ取り込める。玉桐は胸うち騒ぎ、心良からぬあの船ども、駆け引き不便の水の上、元の岸へさぁ漕ぎ戻せ」と苛立つを見てあざ笑い、

「あの輩は二網、五井、七曲とて三人姉妹、江鎮泊の皆大将。我とても者数ならねど、武蔵の豊島の浅草川に都鳥の琴樋とて有りや無しやの弱虫なれど、大箱殿に従って賤の砦の船手の一人、御身を留める手立てにて、かくまで張ったる八重の網。逃れ出るならば出てみやんせし」、聞いて玉桐は怒りに耐えず刀を振って斬りかかれば、身をかわして琴樋は水底にかく飛び入ったり。引き代わって水中より現れ出る下貝は船の小縁に手を掛けて力に任せて覆せば、船底は空を向き、玉桐は水へ落ち入り、水練知らねば浮かびえず、溺れる所を琴樋は近づき寄ったる二網らと一つになって救い上げ、岸へ上れば遠近より雑兵どもが馳せ集まり押さえて縄を掛けんとす。この時宙を駆けり来る夏女は雑兵を叱り退け、新しき縮みの浴衣を取り出して玉桐の濡れ衣と着替えさせ、いたわる所へ用意の乗り物、戸を開き助け乗せ、誘い行く道中へ大箱、呉竹、その余の諸将がいくらと無く群れ来たり。懇ろに一礼成して山の砦へ誘いけり。

※メ、匁（もんめ）：江戸時代、銀目の名。小判一両の六〇分の一。。

さて広座敷に居並んで玉桐を厚くもてなし、小蝶が非命に死にたりしより大円和尚の物語りに玉桐をしたい初め、呉竹の謀り事にてこれまでおびき寄せし事、予て遠見をいだし置き、手配りをせし由など代わる代わる物語り、深く無礼を詫びたりけり。

次の日は三世姫へも披露に及んで、大箱、呉竹その余の者どもが入れ替わり心を尽くして勧めるに、玉桐も姉の非命が口惜しきは元よりにて各々の忠義の篤きを浅からず感じ入り、ましてかくまで心を尽くして留められるを否まん事は云わば岩木（無感情）に似たれども、先つ年に探題の信種主御夫婦よりとりわけて懇ろなる御扱いにて館へ召され、太宰府には勇士少なく、索城、野森などの他にさしたる▼女武者は他に無し。もしも非常の事あれば、国の為に忠を尽くし、日頃の手練を見すべしとくれぐれも宣いしかば、仰せにや及ぶべき御愁眉の御言葉は千金にも代え難し、まさかの時は命をも捨てて、御恩に報いんと誓いし事もある上に、その後日増しに物をたまい、平人の身を客分か何ぞの様なる御仕向け、恩義の深きせうにど☆の一つの功も立てざる先に彼処を背いて三世様へ御奉公は成し難し。それを憎しとおぼしめせば、心のままに計らいたまえ。命は更に惜しからず、同じく一旦まず故郷へ帰したまえ」と義を立て抜いて意地を張り、更に留まる気色も無ければ呉竹は大箱に尚も手立てを囁き置いて、

「さらばその意に任せたまえ。さりながら我々の 志 を汲み分けて、ゆるゆる 砦 に逗留あれ」とそれよりして日毎日毎に善美を尽くし、酒宴を開き、今日は呉竹、明日は 蕃 と大勢の女どもが代わる代わるに主人を為して、立ちいでん日とては無し。今は早義理をも欠き、否めば生憎後になりし妙達、竹世、力寿など、

「まだ我々は一度も御馳走申した事は無し、これからは我々がまず来て料理つかまつらん」とわめき出し、なお否めば目の色変えて腹立ち怒り、

「他人の酒は賞 玩 して、我らが馳走は何故受けられぬ。なんぼ無骨なこちどらもそう易くはせぬものぢゃ。嫌ならば嫌でよい」と 罵 れば大箱は叱り懲らして玉桐に、

「彼女らが切なる 志 をうち捨てたまえば角が立つ」とまた柔らかに引き留め、更に返す気色も無きに、これもかれも女の豪傑、好む所、嗜む所、自然と等しきものなれば▼云う事もする事もなれ、行くままに面白く、思わずも玉桐は秋の末まで逗 留 しつ。

〇これより先に利己蔵らは縄を解かれて清き座敷に日毎に馳走になりたりしが、ある日呉竹が利己蔵を呼び出して囁きけるは玉桐殿はこの山の第二番の大将になったれば家には帰らず。そこは宝の荷物を送り、鎌倉へ下るべし。商い果てて筑紫に帰れば、家内の者にこの由告げて継子に家を継がすべし。玉桐はとくよりも、この 砦 に加わりたき心のある故、さんぬる頃☆、居間の壁に落書きして、「発ちいでは待つ人もあらじ、きたなけき里は再び反 みもせじ、玉桐反す」と云う言葉を句の上に置き読みたる由、彼女自ら物語れりと問わず語りを云い聞かせ、 餞 の小金を与えて下部と共に追いやりけり。目出度し目出度し。

（傾城水滸伝）女水滸伝　十四編ノ三　笠亭仙果編次　一陽斎豊国画
嘉永五年壬子春新板

芦城の番頭利己蔵は忠義の心が無き者なれば、玉桐が賤の砦に一味せしと聞くのみか、売り物の荷をさえに任せられて心に喜び、芦城の家を我が手に入れて栄華を極める時到れりと、玉桐が筑紫へ人を遣わして金銀宝を江鎮泊へ運ばせるその先に、我がまず帰って壁に書きし歌を証拠に訴人をなし、男色のちなみあれば加次郎を主人と立て、我が後ろ見して、ふつき☆を尽くさん。また音鳥を妾として両手に桜と百歳の寿命をこれで保つならばと預かりし代物は捨て売りにして金と成し、泊まり泊まりの遊女に入れあげ、日を経て筑紫へ帰りしが、加次郎にまずその由告げて探題の屋敷へ訴えいで、真空言うち混ぜて、
「玉桐は近江の逆賊、大箱らに一味して、既に彼処へ移り住み、謀り事を定めし上に内通なして太宰府へ彼処の逆徒を引き入れて、この太宰府をもとるべきもよほし、我伴われて彼処へ行き、目の当たりに見て帰りぬ。我れから訴人なす上は巻き添えの罪を許され、継子加次郎をもて相違無く家を継がせてたまえ」と云うに信種も十時姫も驚き怒って、玉桐の恩に背きし行いとこれまで親しく恵みを掛けしが、いと悔しく腹立たしく、万に一つ玉桐が帰らば早速絡めて出せと、願いのままに加次郎を跡取りとし、利己蔵に後ろ見をさせられければ、利己蔵はたちまち威を振るい、傲りに長じ、人を軽しめ、音鳥もその頃は脚気も治って健やかなれば脅しすかしつ口説けども更に受け引く気色は無く、その上に玉桐が江鎮泊に一味の由は更にその意を得ず、心遣い大方ならず、斯様にうるさき所に居て何の益もある事無し。いぶかしきは主人の身の上、姿を変えて忍び忍びて近江に赴き、虚実を聞かんと密かに芦城の家を抜け出て、顔を燻べ髪を乱して袖乞いの姿にいでたち、商人船に便船して下関より陸路をたどって尾道にまで来たりしが、脚気の病が再び起こりて一足も歩まれず、ここにむなしく月日を送り、いささかの路用も尽き果てて、真の乞食となりゆきて医療とても心に任せず、心ならずもこの辺りに三月ばかりさまよい居たり。

○この時早秋もたけて、玉桐もようように江鎮泊を発ち出て、急ぎに急いで筑紫へ帰り、加次郎も利己蔵もつつが無ければ、まず安堵し、音鳥が見えざるを怪しめば、利己蔵が云う様、
「彼女は数多の物を盗み、誰かは知らねど、云い交わせし男など在りしと見るが、五月の末に駆け落ちなし。詮索すれど行方は知れず」と云うは何ともいぶかしけれど、
「それはまず差し置いて、この度の▼旅行の始末を詳しく云わではあるべからず」と草鞋を脱ぐや脱がぬに探題の屋敷へ行き、信種夫婦に目見えを為し、久しぶりにて酒肴で懇ろにもてなされ、此の度の始末もまだ云いいでず、何心無く居る所に組子の兵十人余りが物陰より躍り出て、有無を云わせず押し伏せて高手小手に縛めける。

※高手小手（たかてこて）:両手を背の後ろに回し、首から肘、手首にかけて厳重に縛り上げること。

信種は利己蔵の訴人の由を云い聞かせ、
「恩を忘れて強盗の群れに入ったる不届き者。八ツに裂いても飽き足らず」と言い訳聞かずに責め罵り、有り体に云い説けども証拠は自筆のその折句。此は呉竹が書かせしと実を告げても信種らは更に真といかで思わん。獄卒の手に渡し拷問に及びければ、玉桐は呉竹らがかくまでしぶねく巧み

の罠に掛けしを憎く思えども、つづまる所は大箱はじめ彼の輩が手を尽くし留めしものを片意地につれ無く振り切り帰りし故に彼女らの巧みと利己蔵の不義の訴人にこの縄目、後悔しても真に甲斐無し。神通あって縄切り解き、よしや牢屋を破るとも賤の砦へおめおめとどの顔さらして行かれうぞ。さればとてこの身の濡れ衣を干す由があるまじければ、例え罪には落ちずとも疑い深き信種殿は遅くも早くも責め殺さん。とにかくに無き命、責め苦に会うだけ苦しければと義理に迫って江鎮泊へ加わりし由を白状しければさもこそあれと、いと深き牢屋の内に入れ置きけり。

〇牢屋預かりの司の亀井六郎兵衛と云いし者は近頃死に失せ、男の子無くて福女、花笑とて、女の子二人あり。姉妹共に男にも勝って武芸もつたなからず、女武者所にも召し出さるべき器量なれど、取り持つ人があらずして、あたら武芸の名も埋もれつつ、ただ時世とて女ながらに父の後役を被って女の牢屋の支配をせり。玉桐が探題に俄かに憎まれ言い訳立たず、謀反の罪に服せしを情けある者なれば、姉妹は哀れに思い、心を添えていたわりけるに、利己蔵は万に一つも玉桐が許されれば、年頃日頃の我が私欲も、この時に現れて世も安穏には置くまじとこの二人に物を贈り、牢屋にして人知れず殺さんと謀りけれども、二人は憎んで取り合わず。

〇さても賊が砦にては玉桐が山を下りし後に筑紫へ行かば災いに必ず会わんと救いの為に節柴に夏女を付けて千里に一里を急がせば、日ならずして筑紫へ着き、▼密かなる所へ宿り、玉桐の様子を聞き、その後亀井の家を訪ね、福女に対面して千両の黄金を贈り、玉桐の命乞いを懇ろにしたりしかば、姉妹は女ながら志ある者どもにて、京鎌倉のかみだつ☆人の曲がれる行いを憎み疎み、大箱の心伊達を常に慕って、時もあれば一味すべくも思いければ、快く受け引いて、彼の千両の金を出し、それぞれの役目の効き目、効き目に用いければ、乱世の風俗とて金に傾く人心、千金の子は市に死なず※と例えの如く白状せし玉桐なれども死罪を一統許されて、薩摩方の硫黄が島へ流されるに定まりぬ。

※千金の子は市に死せず：（「史記」越世家から）金持ちの子は、罪を犯してもその金力によって死罪を免れることができる。

薩摩までの送りの者は先つ年に桜戸を都より佐渡へ送りし足高蜘蛛平、土陰土九郎。桜戸を殺し得ずに亀菊に疎まれて、この太宰府へ追い出され、信種に使われけるなり。また懲りず間に此の度も利己蔵より賄を多く取って、玉桐を道にて密かに片付けんと、ことに手荒く扱いけり。玉桐は身も健やかにたくましき生まれなれど、幼きより身を労し艱難をせし事無きに、日頃牢屋に苦しんで、福女姉妹が心を付けていたわれども心地死ぬべく病み疲れ、事に城下を追われる時に▼鞭打たれし背中の傷が痛んで足も引き難きに、手を引きたてられ腰を押されて、呻き呻いて山路を行くに、二日市より下見村と山中を越える程に二人の者は道はかの行かぬに返って疲れたりとて八幡菩薩を祀りたる社の森の木陰に休み、昼寝をせんとしたりしが玉桐の逃げ走る事もやあらんと危ぶむ様にて腰に付けたる縄を取り、玉桐を方辺の木に動かぬ様に括り付け、蜘蛛平は森を立ちいで行き来の人がある時は告げ知らせんと張り番すれば、土九郎は利己蔵に頼まれし事を語り、棒振り上げて玉桐の頭を目掛け打たんとす。この時虚空に弦音響いて鏑矢一筋飛び来たって土九郎の胸を射抜けば、叫びもあえず倒れ伏し、そのまま息は絶え果てぬ。

この物音に驚き駆け入る蜘蛛平は曲者が忍び入るとは知らずして、不敵にもまた棒振り上げしが、

再び飛び来る雁股に首を射切られ死してけり。

　神の助けと玉桐はうち仰向けば、後ろの大楠の梢よりひらりと降りて縛めの縄を解き捨てる一人の娘を誰ぞと見れば音鳥なり。その身もやつれにやつれたるが、影の様なる玉桐にすがり付いて、言葉も無くむせ返りしが、涙を払い、
「利己蔵が我がままに主人を訴人し家を横領し、放佚無慙※の振る舞いを憎めども、身一つにて争い難けん。力も無く心許無き事のみなれば、御目に掛かり、これらの事を告げ参らせんとお家を抜け出て、この道まで来たりしに病起こって進み難く、この程ようよう本復せしが日頃信ずる天満宮の夢の御告げありし故、人目を忍び筑紫へ帰り。この所に待ち合わせて八幡宮に奉納の弓矢を借りて危うき御難儀。一度は救い申せしが、うかうかとここらに居る時は再び憂き目に会い申さん。ともかくも山越しに豊前の国へうち越して、上方へ赴かん」と玉桐は弱り果て、手を取れども歩まれねば、音鳥は甲斐甲斐しく背に負って用心の為に死骸に立つたる矢を抜き取り、腰に差して▼弓を持ち添え、小道を伝い山鹿村の方へ行くに、病み上がりの音鳥は我もひどく疲れて山坂の上り下り、心のみ先に走れど足は後ろへ下がる様なり。山鹿村へからがら行き着き、人も住まぬ家があれば天の与えとここに休らい、清水を結び主人に与え、我も飲んで息を継ぎ、初めて息を付きたりける。

※放佚無慙（ほういつむざん）：わがまま勝手で恥知らずなこと。

　玉桐は賤の砦に止められし、始め終わりをかいつまんで物語り、大箱らが忠と義を重んずる由を云い聞かせ、我が片意地を後悔するに、音鳥も嘆息し、また慰めてうち笑みつつ、
「そう思し召すならば、しばしは山に深く隠れ、身を養い追っ手を避け、この地を離れ近江路へ夜を日に接いで急ぎ行き、彼処の群れに入るならば、今の難儀は昔話、このお趣向が日本一、それはまア後の事、あなたもさぞかし御空腹。吉備団子も腰には無し、雉でも一羽射落として、焼き鳥にでもいたしましょう。お包みもここに置く、寂しくとちっとの間一人で居てくださりませ」と弓矢を手挟みいで行きけり。

〇この村の村長は彼の八幡の社へ詣で、二人の死骸を見つけ出し、
「これは昨日先触れありし流人の送りの官人ならん。さては仲間の者あって、官人を殺害なし、咎人を連れ逃がしたるなるべし。捨て置かれず」と騒ぎ立ち、太宰府へもこの由を訴え、怪しき者の詮索するに空き家に休める女、その様更に只者ならず、弱って見えるは牢屋の疲れ、取り違えに祟りは無し。縛れ括れと村長の指図に辺りの百姓どもは山の如くに取り込めて、玉桐をうち悩まし、そのまま縛め、竹輿にかき乗せて、太宰府の司所へ差し出しけり。
　探題信種は大きに怒り、そのままたも牢屋に繋ぎ、福女らが嘆いても、この度は優免無く重き死罪に定めけり。彼の音鳥はその時に山鳥を携え帰り来て、玉桐を尋ねるに、「そやつも同類、それ縛れ」と百姓らが取り巻くを弓にてひどく打ち悩まし、危うきこの場は逃れしが、
「さるにても口惜しや。しばしの隙に主人をば、取り返されて我一人、生き長らえて何かせん。自害をせんか名乗り出て、共に同じ牢屋に繋がれて、せめては主人の介抱なし。共に頭を刎られんか。又は近江へ馳せ行って、大箱らにこの事を語って助けを乞うべきか」と更に心が定まらねば、天満宮を心に念じ、神の心を占いの神籤を取るに、近江へ急ぎ行けとの御告げにさらばと心を一決し、生半

（中途半端）なるものを持ち、疑い受けては便無しと谷影へ弓矢を捨て、肝太くも山越えして豊前の小倉を指して行くに、始めにも云う如く、少しの路用もとく無くなり。肌へを隠す綴り（粗末な着物）の他は着る衣も先に売り尽くし、玉桐の伴をなせば包みに路用もありけれど、我が身には今に到り一銭の蓄えも無く、行き来の袖にすがり付き、五銭七銭もらっても気力を養う程には到らず、かくては道にて月日経ち、いつか近江へ行かるべき。道行く人の財を奪い、駕籠にも馬にも乗るべしと主人の為には名の汚れも厭わぬ貧の盗み業。黒崎の松原の出茶屋に旅の女二人、方辺に置きたる小包みが重たげにありければ、二人の他に▼主人も居らず、良き折からと立ち寄って盗るより早く受け出すを供と思しき女が目早く見付けて、「おのれ昼鳶め」とたちまち追っかけ、追いついて、包みに手をかけ奪い返すを、そうはさせぬと手を離さず、しばらく挑むその所へ主人とおぼしき女も駆け来て音鳥を押し倒し、

「行き来の人の害になる盗人女は新身の試し。まだこの刀は血を見せぬ。良き幸い」とひらめかせば音鳥は我が力は二人には勝ち難く、はらはらと涙を流し、

「無実に沈みし主人の命。助けんために案内のもとへ赴く途中に路用無ければ、詮方無くも斯様の悪事を成しけるが、実にふとせし出来心。何ほどに打擲され、どれほど恥を見るとてもそれは厭わじ一命は助けて許したまえ」とて、さめざめと泣く様の姿こそは汚けれども、しおらしく愛嬌づき、人柄気高く卑しからねば二人は自然と哀れになり、目を見合わせて、なお詳しく名所を押して問うに、音鳥は包むも悪しからんと、ありのままに詳しく語れば、二人の女は大きに驚き、

「さては予て、玉桐殿の話に聞いて、さる者ありと名は近づき☆の音鳥殿か。私は夏楊、この女は岩飛葉とて二人とも賤の砦に住める者。その玉桐の刀自の身の上案じて大箱、呉竹殿は我らを下したまうなり」とて、互いに不思議の対面を喜ぶにも音鳥は小盗みをせんとせしを恥て、面を赤らめけり。夏楊は音鳥に筑紫の事をなお詳しく口づから大箱殿に告げたまえとて、岩飛葉を筑紫の方へ遣わして、その身は音鳥を伴って、また上方へ引き返す。その後に岩飛葉は太宰府に到りしが、余りに人が群れ集まるに何事かと人に問えば、

「芦城の後家の玉桐が賤の砦に留められしを一味せしかと疑われて硫黄が島へ流される道にて送りの官人を殺してまたも生け捕られ、今日は首を討たれる由。もと探題のお気に入りでちっとの罪は大目に見て御優免もあるべきに、利己蔵と云う番頭が跡式（財産）をせしめる巧みで、めったにれこ☆を使ったげな、それで理も否も正されず、ああ気の毒や、南無阿弥阿弥陀。後家御を贔屓が多ければ皆残念に思う故に一杯人が集まって引き渡されるを見に出た様子、綺麗で立派な女振り、▼お前もちっと休んで居て見て行かしゃれませ。話の種だ」と聞くに岩飛葉は胸轟き、仕置き場近き居酒屋の二階に休らい身支度し、いかにもして助けんと手ぐすね引いて待ち到り、時刻に及べばこの前を引き渡して玉桐をとたんに座らせ太刀取りは後ろに回り斬らんとするを岩飛葉は白刃を討ち振り、二階の口より飛んで降り、群がる中へ斬って入り、まず太刀取りを二つに斬り伏せ、

「今いつ天下に名を轟かす賤の砦の女どもが皆この所に潜まり居て、玉桐を助けし上に太宰府を微塵にするぞ」と罵り叫んで荒れ回るに、敵するものは一人も無く、四方へぱっとぞ退いたりける。岩飛葉は玉桐の手を引き、ここを落ちんとするに、早く逃げたる官人らがこの由を司へ訴えければ、探題信種は驚き騒いで数百の軍兵を遣わして、見附見附の門をささせとへ☆、端辺に二人を囲ませてひしひしと攻めければ、岩飛葉は何おう命知らず、数多の組子を斬り殺せども多勢に無勢で力尽き刃も折れて押し伏せられて、遂には絡め捕られければ、玉桐諸共引きたて行って厳しく牢屋に取

り込めけり。

〇夏女はしばしば筑紫と近江を駆け歩き、一つ一つ事の由を注進しけるが、この頃は岩飛葉さへ虜となりしをしきりに憂い、▼彼女らの命を接がん為に宛名無き落とし文を幾片となく散らしけるが、その文を短く云えば、「賤の砦の大箱ら、太宰府の者に示す。我々亀菊、義時らの邪を見るに偲びず遠からず戦を起こし、朝廷を洗い清め、三世姫を武将と崇め、天下太平ならしめんとす。ここに筑紫の芦城の後家玉桐は我が砦に縁あれば、彼女にその心無しと云えども、強いて一味に加えんとす。この由を告げん為に岩飛葉を遣わしたるに共に牢屋に繋ぐ由、彼女らを助けて不忠の利己蔵、不孝の子加次郎を我が手に渡せば、その功に太宰府は見逃さん。否まば一山人馬を尽くし、太宰府を微塵に砕かん。さりながら下知を守る男女は露ばかりも苦しめじ、夢々恐れ驚くべからず。」信種はこの落とし文を人々が拾って持ち参るを読むに心は安からず、家来を集め評議するに、世に恐ろしき女の豪傑、近きためしは丹波路、馬籠の城主踏通、先のくるまの覆るを見つつ、あとのも倒さんや☆、用心にしくは無し。玉桐らを殺害なせば決して彼女ら許すまじ、まずよく守っていたわれとわけてこの由を牢屋預かりのかの福女に心得させれば、さもあるべき事なりとて妹と云い合わせ、密かに座敷牢に入れて、並々ならずいたわり慰め、旨き物をしきりに食わせて気力を養い得させければ、玉桐は身も太り、昔に変わらず力も付き、この上は駆け歩き、武芸を試しみぬばかりの物思いの一つなりけり。さりとて刃は云うも更なり紙筆も与えざればそよとの便りも成し難く、またいと厳しく守りをつくれば岩飛葉も気は苛立てど、逃れ出るべき暇も無く、只時節をのみ待ち居たり。

〇江鎮泊には追々の注進に憂い嘆き、呉竹も我が知恵に任せ、玉桐をかくまでに苦しませるを後悔し、共々に評議して、遂に大軍を起こして賊が砦をいで発ち、遙々筑紫へ急ぎけり

。

〇大箱の大軍が早中国へ入りぬと聞き、筑紫には大きに驚き、武芸係りの総頭立浪兵衛、女武者の預かり字野江を大将とし、索城、野森、お貞などに数多の勇士を従えさせ、敵九州に入らぬ間に追い払えとぞ下知ありける。雲霞の如く群立つ軍兵、豊前の国の門司が関まで討ち出て、大箱らが船より上がる所を待ち、打ち破らんと評議を定め、太宰府を発ちいづるに、未だ幾ばくも行かぬ程にいかにしてか来たりけん。敵は早くも豊前を過ぎ、当国の赤間、宗像をも▼うち越えて、無碍に近く寄せたり。驚く者から力無く、先陣の索城は虎飛谷に駒を控え、立浪兵衛はえんじゆ堤と云う所にたむろしたり。大箱方には軍師呉竹、卯月この地へ下りし時に地方の案内良く諳んじて、この度智謀を様々施して伏せ勢にて悩ます程に、自ら望んで先陣を乞い受けたる力寿の勇猛、お貞なんどは足へも寄られず。

（傾城水滸伝）女水滸伝　十四編ノ四　笠亭仙果編次　一陽斎豊国画

幸目、狩倉、黄昏、夕映、胡沙丸、損二郎、紺太郎は四方に起こって攻め立てれば、手初めより

まず筑紫勢がひどく乱れて敗北せり。次の日はゆかたが辻にて再び合戦に及びけるが、秦名は索城と戦いて、更に勝負無き程に、韓藍は矢一筋射掛けたり、索城は左の肘を射させて慌てて引き返す。

これより総軍また乱れて、えんじゆ堤の陣も取られ、索城らはとらとび谷の立浪の陣へ加わり、敗軍集めて息を接ぐ、字野江はひどく恐れて野森、お貞と諸共に引き退いて城に入れば立浪兵衛も心ならず、頼みきったる索城はまず一番に手は負うたり。聞きしより思いしよりも百倍勝りの近江勢は勢い猛く矛先鋭く、とてもは向かい難しと悟り、戦わぬにしくは無しと、とらとびの陣をも払い、はうはう城へ逃げ込んでただ要害のみ堅くせり。勝ち誇ったる近江勢は早くも太宰府の間近く押し寄せて、東の山には花的、黒姫、今板額、西の山には芍薬に大鳥、燕、後ろに秦名、韓藍、早蕨、前には▼打出が石火矢を放って、煙りの中よりも桜戸は飛子、涼風を引き従えて押し寄せるかかりければ城よりは大石、大木投げ下ろし、弓、鉄砲をしげしげ放ち、をさをさ寄せ手を防ぐものから、討っていづべき擬勢は無し。さすがに要害堅固にて小さからぬ太宰府なれば、大箱は諸将を励まし攻めれども容易く落ち難し。探題せうに☆信種はお貞に兵数多差し添えて忍びやかに城を出し、都へ上せて六波羅に急を告げて救いを乞う。この時に六波羅には武蔵の守泰時朝臣が内裏を守護して在りけるが、この注進に驚き憂い、誰を加勢に遣わさんと、とりどりに評議あるに、女武者の随一に斑駒の面高とて群を抜け出た豪傑あり。この女の友達に呼び名を関屋と呼ぶ女あり。実名は勝子と云えり。館の何がしかの娘にて、近き頃父に別れ、岡崎村に引き込んで武芸指南を渡世とせり。真を云えば和田の三男、朝比奈の忘れ形見、巴御前の孫に当たり、血筋とて争われず、力も手並みも父と大祖母の気を受け継いで只者ならず、武者所、北面、鎌倉の他の板東武士にも男にさせる者は無し。女丈夫は少なからねど、関屋に続く者はあらじ。しかも容色麗しく髪は長くて□□□□余り、色白くして信濃路の雪をあざむき、▼更科や姨捨山の月のまゆかぜの、はふりの隙間をいとう、花の顔ばせ匂やかにて☆、巴御前によく似たりと昔の事を覚えている老人は常に云えり。和田の家は断絶し、義秀が島へ渡って後に太刀野は母の叔父なりければ、関屋を子として育て上げ、武蔵より都に上って大内の滝口（警護役）※を手筋あって務めしかば、武芸も並には優れたり。ときよなり血筋なり、関屋はこの道を自然と好み、父に教わり、また師を取って、藍より出て藍より濃く、始めにも云う世の稀者。この女を召し出して太宰府の加勢にやらば、大箱らも恐れて引かんと、面高は泰時に勧めて自ら岡崎へ赴いてその由云うに、この関屋の一番弟子に隠文の袖の香とて印可をとって武術に詳しく心もかうなる娘あり。これが母は天満宮に申し子して、梅の花散りたる紙へ書きし文を袖に隠すと夢に見て、それより孕みてもうけし子ゆえ、あだ名をも隠し文と付けたり。

※滝口（たきぐち）：平安・鎌倉時代、宮中の警護にあたった武士。滝口の武士。

関屋は容易く面高の言葉に従い、袖の香さえ、そのさに在りしを引き合わせ、この子も京家の武士の娘、誘い行って手柄をさせんと引き連れて、六波羅へ到り、我が思い設けし計略をこうこうと語りいで、六波羅の軍兵を数多預かり袖の香と面高を前後に立てて太宰府へは赴かずにただちに賊の砦へかかりぬ。

〇この時に大箱は日毎に城を攻めれども、更に出ても戦わず、また京、鎌倉より加勢の来る様も無く徒に日が重なり行くに、呉竹はいぶかしがり、

「これは京、鎌倉に良き武士あって、巍を囲み趙を救うの謀り事、例えば蛇の尾を踏んで頭を後

ろへ向かする手立て。まずこの城は救わずして、我らの根城の江鎮泊を攻めはせじや」と危ぶむ折から夏女は
「例の▼駆けり来たり関屋と云える女武者が一万余騎の大軍にて我が山陣へ攻め寄せたり」と告げるに、さてはと驚き、ひとまず城の囲みを解き、筑紫を退き近江へ帰りぬ。この時も所々に伏せ勢を置きければ、退くを見て追いいつる筑紫勢を斬り悩まし、見苦しき事更に無く、これにつけても太宰府には更に肝をぞ冷やしける。

〇また賊の砦には船手の大将横鯛は妹の下貝の意見も用いず、功を貪り、手勢を僅か引き連れて、関屋の陣を取ったりける。高月村へ密かに赴き、陣屋に忍ぶその様を関屋は見つけ、謀り事を設けて待つとは夢にも知らず、その夜関屋の居間に込み入り辺りを見れば人は居らず、清き机に書物を飾り灯火の影かすかなり。この時合図の鈴の音が響くとひとしく一度に起こる伏せ勢は潮の湧く如く、鐘太鼓の音、鬨の声は天地も動くばかりなり。横鯛は手勢と共に斬り回れども、事ともせずに数多の軍兵が折り重なり、残り少なく生け捕りけり。
　かくと聞くより二網、五井、七曲は下貝を云い励まし、横鯛を救わんと高月村へ押し寄せつ、二網姉妹は先に進み下貝は後ろに続き、関屋の陣へ突いて入るに、例の如くに人気は無く、旗のみ風にひるがえり、その様いとも怪しければ、はっと驚き引き返さんと騒ぎ立つ、その時に銅鑼の音響くと等しく八方より数千の軍兵俄かに起こって虜めたり。三人の姉妹、下貝共に力の限り切り抜けて、余呉川まで逃げ延びけるがいよいよ厳しく追い詰められて、下貝は水に飛び入り底を潜って帰りしが、二網も五井も、既に危うきその所へ琴樋、日熊、龍間らが後より来たって救いければ、辛くして命を拾いぬ。七曲は刀の刃が鬆の如くなるまでも、戦い過ぎて力衰え、▼敵の虜となりにけり。

〇この時に大箱らは砦の間近く帰り来たり。味鴨の注進にこの由を聞き、大きに憂い、呉竹に語らう折しも早敵が大勢駆いでたり。大将は面高なり。花的たちいで刃を交え、偽って馬を返し追い駆ける面高に矢頃を計り、射掛ける一の矢を面高は太刀にて斬り払えば、二の矢も面高馬上に伏し避ければ、またも射損じつ、呆れて花的が引っ返せば、面高も侮られぬ弓勢かなとて、馬を返す油断を見澄まし、花的は立ち返って射掛ける三の矢は兜の立物※を射切りければ、面高は肝を冷やして恐れて陣へぞ引っ込みける。

※立物（たてもの）：平安時代以降の兜の額の部分や側頭部等に付く装飾部品。

　この時関屋は大薙刀を小脇にかい込み立ちいづる、その様威あって麗しく、ひらのねおろし☆吹き散らす、ゆき恥ずかしき薄化粧、烏帽子に包む碧の髪はやすの河原の青柳を綰ねし如くたおやかに、緋縅の鎧にすそがなものてりあひてせたのゆふでり覚えたり☆。乗ったる駒は父譲り、太刀野に育ちし赤馬にて赤留とも名付くべし。六十余州を選りたる女の豪傑小百人集まりたる江鎮泊にも、斯様の女は未だ見ず。実に実に巴の孫ならん。再来なるかと大箱は愛で敬って、しきりに誉めれば、桜戸、秦名はうち腹立ち、早くも馬を乗り出すを関屋は優しき目を見張り、
「我、汝らに用は無し。大箱出て勝負せよ」と云えば大箱は躊躇わず、静々と乗り出して馬の上より一礼し、

「北条氏の邪非道に、花咲きあえぬ日陰の▼蕾、頼家公の忘れ形見、御いたわしさに守たてて、かしづき申せど、我より求めて帝はもとより鎌倉へも弓を引かん心は無し。友達の災難を救わん為に戦を起こし、君を労し参らする恐れ多さは限り無し」と云えば関屋はくわっと怒り、

「やおれ大箱、言葉を巧みに欺くとも我決して許すまじ。馬より下って降参せよ。さらずば微塵に為してくれん」と大薙刀をひらめかせば、秦名はたまらず駆け出して狼の牙を植えたる棒をうち振って立ち向かえば、桜戸も十文字の槍を捻って一つにかかれど関屋は更に驚かず、二人を相手に秘術を尽くす、両陣互いにええるが如く、この戦いを見居たりしが、関屋に過ちあらせじと大箱しきりに引き鐘を打ち鳴らさせれば、本意無げに桜戸、秦名は引きければ関屋も追わず陣へ入り、その日は互いに休息せり。

関屋はつくづく大箱の陣の立て様、並々ならず、引き続く武者どもがおびただしいにも、その様のまた凛々しきにも驚き、心の内に深く感じて先の日に生け捕りし横鯛、七曲を引き出させ、氏も系図もさもあらぬ大箱に多くの兵が従う由を怪しみ問い、忠義の心が類い無く、人を敬い、慈悲深きその由を詳しく初めて聞き、心動いて胸安からず、夜更けるまで月を見て、うち嘆き居る所へ芍薬一人が入り来たりぬ。

関屋は心広き者にて、更に恐れず陣へ入れれば初対面の礼終わって芍薬は声を潜め、

「先つ年に討っ手に向かい、呉竹に謀られて、まげて彼女らに降参すれども帰参の望み返詞も絶えず、大箱も又、同じ。今日引き鐘をしきりに鳴らして桜戸、秦名を引かせしも大箱のこれ仕業。我ら二人はかくまでに、降参すべく思えども、数多の者どもが受け引かず、私はこの事を御身に語らい、内通して手筈を定めて桜戸らを生け捕らせ、参らせんとて、わざわざ来たり」と聞くに関屋は大きに喜び、酒肴を調えて芍薬を手篤くもてなし、更に疑う心無し。なお計略を示し合わせ、また亀菊、義時らの道に背きし行い多きを語り出てうち嘆き、芍薬はこの陣屋に宿りぬ。

次の日に関屋、芍薬が駒を並べて押し出せば、大箱は芍薬が降参せしをわざと怒って黄葉を呼び出して、まず芍薬と戦わしめるに、黄葉は二つの鞭に馬より下へうち落とされて這々逃げて引き退く。その夜二更の頃に及び、芍薬の案内にて関屋は三軍残らず引き連れて大箱の陣中へ夜討ちをかければ、予ねてより云い合わせたる事なれば、関屋を深くおびき入れぬ。大箱の居所には紅の衣にて張りたる灯籠を常に下げたりと芍薬が予て告げければ、それを目当てに忍び入るに、灯籠あれども人は見えず、また芍薬を尋ねるに何処へ行きしか影も無し。

「もしや敵の謀り事に陥ったるか」とうち驚く、耳を貫き響かせる石火矢の音につれ、たちまち起これる伏せ勢は幾千騎とも計られず、関屋も▼さすがに胸塞がり、群がる敵を斬り抜けて高月村へと駆けて行く。

馬の諸足を伏せ勢が鍵縄にて引き倒し、遂に関屋を生け捕りけり。袖の香は桜戸と花的と戦いしが、胡沙丸に生け捕られて面高は秦名に出会い、遂に討ち負け絡められ、岩居は軍兵を引き具して、たかつき村へ乱れ入り、支えるものを斬りなびけ、横鯛と七曲を助け出して武具、馬具、兵糧を奪い取ってぞ帰りける。

〇大箱は例の如くに関屋、面高、袖の香の縛めの縄を切り解いて、慇懃に慰めれども、恥を知ったる女らなれば、ただ首打てと悪びれず、呉竹も差し寄って様々に理解を説き、

「関屋の祖父（和田）義盛は北条の讒言にて家を潰し、身を滅ぼし、（朝比奈）義秀も行方知れず。

されば義時、泰時らは親、祖父の仇なるをその北条に従って武芸の誉れを表さんと、ひたすらに功を競い、孝行にも欠け、義にも暗きは 古 今にあるまじき。女丈夫には千慮の一失※。願わくば、よく良くその身を省りみて三世姫に御味方あって▼北条を滅ぼしたまえば、義時と心を合わせる亀菊の威も薄らいで、 帝 は無事に太平ならん。かくてこそ忠 孝の道は全く候わめ」と言葉を尽くす真実に関屋は更なり面高、袖の香、共々に惑いを開き、心を傾け降参すれば、大箱の喜び上も無く、姫の御前に 誘 い行き、御土器を申し受け、更に酒宴を開きけり。

この山陣の内にして関屋は勇猛振り、役とも二三とは下がらず、その上心穏やかにて人品気高く美しく、自然と備わる大将の威徳に桜戸、秦名らも妬みの心をうち忘れ、席を譲って 敬 いけり。

※千慮の一失（せんりょのいっしつ）：どんなに賢い人でも、多くの考えの中には一つくらい間違いや思い違いがあるということ。

〇されば再び太宰府を攻め落とさんと、この度は関屋、面高、袖の香を先陣として、その余は皆初めの度に少しも変えず、船手を預かる誰かれをも後陣に加えていで発ちぬ。この時に筑紫にも索城は既に傷も癒えて喜びの酒飲み交わす、折しも諸所より注 進あって、

「六波羅殿より賊の 砦 へ向かわせられし関屋らは皆降参して敵となり、一つになって此方を指して攻め来たりぬ」と告げければ信種も顔青ざめて、ひたすら恐れ呆れるを索城聞いて少しも騒がず、

「先には早く矢傷を受けて各々方の臆 病 を側で見ているもどかしさ。この度は以前の恥を誓言立てても濯いで見せる。どなたも御案じなさるな」と実にもあだ名の向不看。その広言に励まされ人々も勇みをなし、また索城を先陣として立浪兵衛、字野江も引き続き、数多の軍勢は太宰府を離れ、とらとひ谷☆に陣を取り、敵が寄せるを待ち居たり。

大箱は早筑紫へ入り、▼ひしひしと押し寄せて、先陣関屋が進み出れば索城はちっとも疑義せず、「不忠不義の女め」と 罵 り罵りいでいで迎え、十太刀ばかり戦いしが早負け色になりしかば、過 ちさせじと駆け出る野森。此方よりは面高、袖の香は関屋を助けて働くを今日の 戦 の手始めにて、両軍互いに火花を散らして入り乱れて戦いしが、筑紫勢は遂に負けて城へ駆け入り音もせず。大箱は城を囲ませ様々に 罵 らせて、索城を怒らせ、斬っていづるをおびき寄せ、こしらえ置きし落とし穴。折りふし霜月半ばにて、今朝より降ってやや積もる雪に隠れて少しも見えねば、索城は琴樋と横鯛に渡り合い、うまうまと謀られて遂に穴へぞ落ち入りける。

大箱はそのまま生け捕らせ、我が陣屋へ引き立てさせ、例の如く縄を許し、説き諭して降参させる。斯様の事は幾度も同じ様なる筋なれば、言葉短く略して記しつ。

〇これよりして太宰府は固く城に閉じ籠もり、また更に戦わずに大箱は思いしよりも城の強きに攻めあぐみ、心疲れてうち眠るに、在りしに変わらぬ小蝶の姿が呆然と現れたり。

大箱は夢心に、

「さては迷って居たまうか。御身の妹玉桐殿を山に迎えて諸共に衣通を攻め潰さんと、その事に多くの月日を費やして、返って今は妹 御 を牢屋に入れて苦しませるを云い甲斐無しと、我々を恨んでこれまで御座したるか。面目なや」と云いければ、小蝶は 頭 をうち振って、

「何の▼為にてあり、今百日を過ごさぬ間に御身は重き 病 を受けん。此の 病 を治さん者は他の国にある事無し。東 の方を訪ねたまえ。京鎌倉も太宰府も賊の 砦 の勇威に恐れ、征伐はさて置いて、ひとまず罪を許し、彼方此方へ引き分けて、召し抱えんなど評議の最中。されば玉桐、岩飛葉も急

いで殺す事はあらじ。逸らば返って救い難し。早々戦を退けて身を大切に為したまえ。又、渋木女を殺さん者を総大将にと遺言せしは腹立つままの末期の愚痴。ましてや玉桐が山陣へ加わるとも、夢必ず私の代わりに立てたまうな。此は総軍の心を動かし、害のみあって益は無し、私の儀は返って不忠。過ちあるな」と云い諭し、かき消す如くに失せければ、大箱は現に返り、呉竹に包まず語れば、

「小蝶の刀自の夢の告げ、理に叶いていと尊し。御身に病の起こらぬ内にさぁさぁ戦を収めるべし」と総軍に触れ知らせる程に、果たして次の日大箱は頭痛み熱発し、背に腫物を生じたるが毒を包みて世の常ならず、下貝進んでで云いけるは

「私が武蔵に在りし時、亡くなりし母は（面）疔を病み、療治の手を尽くしても更に印が無かりしに、下総の八幡に安刀自と云う女の名医、彼女に診せよと人が申せば、その安刀自を頼みしかば、たちまちに本復致したり。道は遙かに遠けれど、夜昼急いで彼処へ行き、誘い帰り候わんか」と云うを呉竹は聞きながら、

「東の方の医師をば訪ねよとの夢の告げ。自然と合うも一つの不思議。それならば大儀ながらもこれよりすぐさま出立あれ。我らは陣を引き払い、江鎮泊にて待ち申さん」と、安刀自へは金二百両、下貝には百両の路用を与えていで発たしむ。それよりして大箱を乗り物に助け乗せ、悠々と陣を引くに、又もや敵の伏せ勢に悩まさるなと、太宰府にては以前に懲りて更に追わず、おめおめ陣を払わせしは愚かなる事どもなり。

〇さて下貝は只一人、暁に発ち暮れに宿り、荒き風、冷たき雪、空の寒さを堪え忍び、急ぎに急ぎ武蔵に来たり。我が故郷も余所に見て、早利根川の辺へ着き、市川の方へこさんとするに、夜は早更けて四ツ過ぎなり。船守りを頼めども公の定めなりとて夜明けるまでは船を出さず、今宵急がば八幡までは夜半頃に行き着くべし。密かに渡す船もやあると、あなた此方を歩くに網船とおぼしきが此方の岸に一艘あり。たくましげなる男が居て、「姉御は何を尋ねるのだ」と声掛けられて幸いと、▼

「松戸へ急ぎの用ある者なり。船賃は望みに任せん。密かに渡しくれまいか」と云うのを聞きつつ頷いて、

「ならぬ事だが嫌と云うのも、どうやら意地の悪い様な。さぁさぁ早く乗りなせえ」と云われて下貝ひらりと乗れば、

「夜でも人が見ては悪い。網の掛け船てござれ」と云いつつ竿を差し入れて、ともを張って押し出す。下貝は何の心も付かずに横に転げてうち伏すに、道の疲れに思わず知らず、前後も忘れ眠って動かず、船主はほくほくと笑いつつ、麻縄取り出し引きしごき、下貝を厳しく縛め、目をうち覚まして驚くを、さもあらん、さもあらんと懐中の金包みの着替え奪い取って、あみに巻き付け、そうはさせじと身をもがく下貝をひっ担ぎ、川中へ投げ込んで仕合わせ良しと喜びつつ、曲者は櫓を押し押して松戸の方へ漕ぎ去りけり。

　これより後の物語りは十五編目の始めに詳しく。

〇百八人の女ども、江鎮泊に集まって前生（前世）を知りあきらめ、三世姫が世にいでたまい、それで一期栄えるまで、今少しにて遠からず、御退屈無く読ませたまえ。目出度し、目出度し。

＜翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三　禁転載　底本／早稲田大学図書館所蔵資料＞